

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「支援のキーワードは平均を基準にしない」

参照『知的障害と発達障害の子どもたち』より 著者：本田 秀夫

【知的障害と発達障害の関係】

〈行政用語〉

〈医学用語〉神経発達症群

知的障害	知的発達症 ※診断書に「知的発達症」と記載されることが多い
発達障害	コミュニケーション症群 自閉スペクトラム症（ASD） 注意欠陥多動症（ADHD） 限局性学習症（SLD） 運動症群 他の神経発達症群

『ちょこっと解説』

- ・医学的には、知的障害と発達障害は神経発達症という同じグループにまとめられている。日本の行政用語では、知的障害以外の神経発達症を「発達障害」と言っている。法制度上でも知的障害と発達障害への支援は別々に定められており、知的障害は療育手帳、発達障害は精神障害者保健福祉手帳となる。併存する場合は、両方を申請できる。
- ・発達障害はグループ全体の名称で、診断名ではない。限局性学習症（SLD）を日本では学習障害（LD）と呼ぶことが一般的で、行政用語としても広く使われている。
- ・今後は発達障害ではなく、教育現場でも神経発達症を使うことが増えるかもしれない。

【対応の基本は、早く】

知的障害・発達障害の特性には、よくなっていく部分と、あまり変わらない部分がある。子どもは成長していくので、基本的によくなっていく部分が多くなる。例えば、対人関係が苦手でも、成長するにつれてその子なりのやり方で対人関係の築き方を身に付けていく。苦手さは大人になっても残るが、自然経過で一層悪くなるようなことは原則としてない。

ある時期から情緒が不安定になる。これは環境との相性に問題がある。情緒が乱れるのは、障害の特性ではなく、二次的に起きている。二次障害を予防するためには、早期発見・早期支援が必要となる。障害の特性に早く気付いて、早く支援すれば、子どもは安心して過ごせる。毎日安心して過ごせれば、感情や情緒は乱れない。

【支援のキーワード】 平均を基準にしない！

○知的障害

発達が「ゆっくり」である。他の子と比べるのではなく、その子の「ゆっくり」ペースに合ったタイミングや方法でのんびり構える。

○発達障害

発達が「アンバランス（凸凹）」である。得意と苦手ははっきりしているので、その子の強みを生かしたやり方・環境を考える。



とれたて直送便



「自立」とは？～一人で生きていくことを目標にしない～

「最小の支援で、最大の力を発揮すること」だと思います。大事なものは、できることを自分で判断して実践する力（自己決定力）と、困ったときに人に援助を求める力（相談力）です。「自分で選んでよかった」、「誰かに助けてもらってうれしかった」と感じられる経験を多く重ねて、自分でできることと、人に手伝ってもらうことを理解できるようにしましょう。